

小説

ボクが死んでから気づいたこと

稲瀬 隆

ボクは死んだ。

その瞬間、ボクの人生は一瞬の中に圧縮され 無限の時間の中に放たれた。

死は永遠の時間への入口だったのだ。

アラスカの先住民が何と語ったのかは知らない。

ニーチェが悟ったという永劫回帰が何なのかも知らない。ただここには終わることなく、小さきに収束することも

ない、自由にそして永遠に展開を続ける無限の時空がある。生きていく時に肉体の五感で感じ取る「現世」は、時間が別次元で流れる三次元の世界だった。死後の世界では、出世以前の世界と同様、時間は流れることなく、そこに在り続ける。何処に行くか、は、何時に行くか、と同義だ。

今のボクに確かにあるのは起点だけだ。それは死んだ瞬間の鮮明な画像だ。

失われた脳の視覚野に焼き付けられた映像は、フロントガラスの視野いっぱいに迫ってきた、トレーラから崩れ落ちるコンテナ。聴覚野には「あーっ」とも「わあっ」ともつかない一瞬の悲鳴と、鉄の塊同士が衝突した轟音、そして生身の人間が潰れさた、ぞっとする音。

避けられないか、だめだ、なんでこんな日に限って代車の小さい車だったんだ、なぜこんな天気の良い日に走っていたんだ・・・ほんの0.5秒ほどの間にさまざまな思考がフラッシュした。同時に脳内のスクリーンには、生まれてこの方、目にした様々な情景と、おそらく夢でしか見てないような景色までが脈絡もなく超高速のスライドショーに投影され、そして無限の時間に 吸い込まれた。

夢なら肉体からくる苦痛や快感が今を作る。寒さ、暑さや尿意、性的快感さえ夢の一部になる。だがここにはそれがない。生きている人間が「現実」と信じる世界は、三次元の物質空間が時間軸に乗って変遷する。日々、時々に移り変わる世界に触れて人は「この世」に「生きている」ことを確認する。だからこそ夢という疑似的死後体験から目覚めた人々は、まず時間軸上の位置を知りたがる。太陽の

この世界には実体がない。時間も、空間も、肌に触れる何物も、五感で認めうるなものもない。今が何時で、ここが何処で、自分が誰かも確認する手立てがない。夢の中では自分が少年であったり老人であったり、男でも女でもあったりする。だがここでは、イヌやクマやサカナのような動物だったりもする。それどころか生物でさえない、イグルミのような存在にも変化することだってある。

いまのボクは、自分が自分であり続けることの困難さに直面している。自分が自分であることを思い続けねば、自分は無に帰する。この無に帰することが「悟り」であり、楽になることなのだろうが。しかしそれは死より怖ろしい気さえする。

高さを確め、時計を見、日付を気にする。

だがここにはいつも、時間が常に共に存る。そして、現実と空想の境もない。この身はつぎつぎと、文字通り現実離れしたな様々な場面に放り込まれる。ボクはその時々々の自分を、必死で務める。

ある時は掘らされた深い穴の前に跪き、首をうたれる僧侶だった。衝撃が後頭部を襲い、混沌の中に落ちた。が、大丈夫。必ず生き直せるから。またある時は、海岸に建つ石造りの塔の窓から、妻らしき女性を大声で呼ぶ初老の白人だ。余命は幾ばくも無い。何処の異国ともつかない島で迷い、ホテルを探す場面にもしばしば投げ込まれる。そんな脈絡なく展開する情景の連鎖の中でもこのところ、繰り返される設定がある。それは病室のような白い光景だ。彼ら、彼女らは、多くの場合、白く明るい靄の中から忽然と現れる。

「気が付きましたか？」

女性の声が聞こえる。気付けば宙に浮くボクの足下に、ベッドに横たわる自分が居る。顔から頭にかけて包帯が巻かれ、体は白い布地で覆われている。

「お加減はいかがですか？ どこか痛いところはありますか？」

ベッドの傍らに白い服の女性が見えたが、顔ははつきりとはわからない。

『これは幽体離脱?』

シニカルな感情が湧く。ボクが死んでいるなら、彼女は死体に話しかけているらんだろうか?

「ちよっとお待ちください。……先生いらつしやいますか……205Cの患者様、気が付かれました」

複数の規則的電子音を、ただしばらく聞いた。

ふっ、と靄から人影が現れ、尋ねてくる。

「お名前、おっしゃってください」と別の女性だ。

お名前? ボクはだれだろう? 何をどう言うべきかわ

からない。

「手を握ってください」

死体となったボクに動かせる手足があるはずはない。

目の中を強い光がよぎったように、見下ろす視界が真っ白になった。その羞明の知覚の中から徐々に人の顔が浮かびあがり、整った華奢な顔立ちにまとまる。だが、《見えるもの》が本当にそこになるのかは分からない。

「お名前は?」

わからない。わからないから答えない。

「聞こえていますか? お名前は?」

『205C』

「聞かれていることが分かりますか?」

小さく頷いたかもしれない。今はそういう《役》なのだろうから。

「では、お名前は?」

『わからない』

自分がそう言ったのかも定かでない。

「ここはどこかわかりますか?」

自分が誰かすら分からないのに、状況が分かるわけもない。そう、自分が声に出したかは定かでないが、相手が苦笑する気配がした。

「頭の方は大丈夫そうね」Your head seems OK.

きつと彼女は医師だ。だが、ここはどこだ?

医師はチェックシートに何やら書き込みながらボクの手足を曲げたり関節を叩いたりしている。そんな気がする。いや、あくまでそんな感じがするだけだ。なにせボクは死んでいるのだから。手足もとくに死んでいるはずだ。それでもなにか《感じる》ように思えるなら、それはきつと、手足を失った人がその痛みを感じることもあるという《幻痛》フアントム・ペイン》のような幻覚だ。

「よくご存知ね」Tu sais bien.

彼女は言った。これは何語だろう。この人は心を読むのだろうか。

「ふふっ、」と彼女が笑った。

「そんな力は私にはありませんよ」Ich habe keine solche Fahigkeit.

頭の中が混乱している。いや、死んだボクに頭など無い。きつと思いが不随意に、音声化して外に漏れ出ているのだ。

そして彼女は消えていった。

意識は虚空を飛んで、山野に旅立つ。遠い昔の記憶のようでもあるし 現在進行形の繰り返しのようにでもある。

《映像》は編集ミスの動画のように、何度も少しずつ違って繰り返される。美しい高原だ。どの国だろう。楽しいグランピングだ。家族と一緒に。息子? 娘? 妻? 両親? ずいぶんたくさんのメンバーだな。と、次の瞬間。また、車のフロントガラスいっぱい、前を走るトレーラのコンテナが広がって襲ってくるのが見えた。この設定では、ボクはここまで、幸せだったのだ。それまでの日々を、なみなみ溢れそうな幸福を、一滴もこぼすことなく大事に過ごしてきたのだろうか。

『一緒に乗ってた家族は?』

「今はそんな事を考えずに、ご自分のことだけ考えましょうね」

ナースとおぼしき女性と《話す》 本当に彼女と話して

いるのか、は分からない。ボクは《幽体離脱》を起こしたり、《死体》の中に吸い込まれたりしながら《会話》を続ける。今はまだ死にきれない《終末期》なのだろうか。『もう何度もそんな風に答えをはぐらかされてきた。はつきり言ってください。死んだんですね?』

女性は答えない。

『ボクにはもう手足もない。死んでいる。家族もきつと』
「そんなことはありませんよ。ご家族は皆さん、ご無事ですよ」

『ウソを言うのはだめですよ。患者へのウソは倫理違反とされている。なんのための倫理かは分からないけれど。』

女性が黙る。

『家族とはさつきまで一緒にいた。その庭を一緒に歩いた。死んでいるボクの方にいる。』

躊躇いながら女性の声が小さく叫ぶ。

「〇〇さんはちゃんと生きていますよ!」

そうか、《ここ》では、ボクは〇〇さん、というんだ。

『でもボクには生きている感覚がまるでない。なにも食べないし 排泄もない』

「それは点滴しているからです」

『もうずいぶん長いこと、こうしているような気がする。点滴だけじゃとても無理だ。経管栄養? 火傷もひどいんで

すか……』

押し黙った女性が霧の中に消える。舞台的一幕が終わった。ボクと同様、彼女も《役割》を演じている。現実感がまるでない。《現実喪失感》というのだろうか。

生前の自分は何だったんだろう。頭はまるでインターネットに直結したブラウザーのように、いろいろな概念や単語が浮かんでは消える。《幽体離脱》と入れると、《離人症》の語が出てくる。これはすごい。だがそれらの源が自分自身のため込んだ記憶によるものなのか、実際に多数の記憶や想念に連結したのかは分からない。

「〇〇さんは、ちゃんと生きてらっしゃいますよ」

女性医師はいつも、ふっ、と現れる。気づくと脇にいて無いはずの手足をチェックしているようだ。

「どこか痛いところ、辛いところはありますか？」

「触れているのが、分かりますか」

「こうすると痛いですか」

同じような問答が繰り返される

「〇〇さん。少しずつですが回復していますよ」

横たわるボクの傍らに立って、語りかけている。ボクの視線はそんな映像を見下ろしている。

『ボクは死んでいない、ということですか』

「そうですね。手足にはちゃんと反射があるし、もちろん脳死判定の基準にも全くひっつかからない……」

『だからと言って、ボクが死体じゃない、と言えますか。WHOの健康の定義という靈魂が、体を満たしてない。たしかに先生にはボクがフィジカルには死んでいないと証明する手段がある。一方のボクには自分がスピリチュアルには死んでいる、ということを証明する手立てがない』

「WHO、世界保健機構の定義ってあの、身体的、精神的、社会的に良好な状態、という理念的表現ですか？」

『近いうちにスピリチュアル・ウエルビーイングが追加されるはずですよ。途上国だけでなく、欧米でも支持が増えている。いずれにせよ、ボクの体には靈魂が詰まっていない。皮膚一枚の下、全身に満ちているべき力が虚無だ』

ボクはボクらのそんな会話を見下ろす。《幽体離脱》は《離人症》だ、と脳内ブラウザーは言う。その先には《統合失調症》が現れ、さらに《現実喪失》が紐付けられる。死んでいるボクは、肉体のある世界では、精神疾患とみなされるのだろうか。

時間は、死体にとって意味があっても、死者にとってはほとんど意味がない。時の流れを超越した世界の「今」

が、どこに位置するのか、見当もつかない。

そして女性医師は不意に現れる。

「眠れないんですか」

『死んだ人間は眠りらないので。今は夜？』

「夜の十一時です」

『先生が巡回ですか？』

「ナースの定時はさつき終わったばかりです。お会いになったでしょ？担当に」

覚えていない。覚えるということも、時系列の中があつてこそ意味を持つ。

『では？』

「寝当直の前の確認です。この部屋は最近オペした私の患者さんばかり。で、〇〇さんにも少しお話しを伺おうと思つて」

『こんな時間に話してて、いいのですか』

「小さな声で少しだけ、ね。この部屋の皆さんは高齢で、みなさん厳しい状況なんです」

『深い眠りにある、もうすぐボクのいる、こちらに来る、ということですね』

医師は言葉を濁した。

『先生はこの《死体》に興味があるんですか』

「そう」と、少し口元がほぐれて「とくに喋れる死体には

ね」

『いま《死体》って認めましたか』

『ごめんなさい。失言です……』

『先生はボクの話聞いてどうするおつもりですか』

「……」

『先生は脳外ですね？ すばらしい。第一線で働く女性の脳外科医は貴重だ』

「脳外は女には辛い、と？」

「男でも辛そうだ。なのに、なぜ脳外を？」

「学生のとき、父が脳梗塞で倒れたのがきっかけかな」

『すばらしい動機だ』

「きれいでごです。本当は、なんども途中でやめようと思つた……なんでこんなところ来ちゃつたんだろう、つて」

『先生、ご家族は？』

「いますよ。母と姉が」

『失礼ですが、ご結婚は？』

「なかなか、ご縁がなくて。こんな忙しい毎日だから」

『だいたい女医はなかなか結婚できない、とか』

「よくご存じですね……」

『今日日、認定医だけでは勤まらない。専門医までとなると気づけば三十歳を超えている。そこで焦ると依存男子に

つかまって・・・』

「〇〇さんはコワいなあ。なんでも知ってる・・・」

医師はそう呟いて去っていった。

ナースの巡回の合間だろうか。近くで話し声が全く聞けない空白の時間に女性医師は現れる。

「〇〇さんが見ている世界をもっと知りたいんですよ。〇〇さんが言う『死後の世界』はきくと、臨死体験とも通じるものがあると思う」

『興味本位ですか』

「サイエンティストとして、まじめに。脳のどの、どういう機能が関連しているのか。脳外科医としてとても興味がある」

『問診のつもりなら、そんな前置きは禁忌ですね。情報バIASを誘導する』

「すみません。気を付けます」

『ボクの話して、症例報告でも書くつもりですか？』『頭部外傷および重度火傷に伴ったコタール症候群の一例』とか』

突然、頭の中に浮かんだ一語が、流出した。自分を『死んだ』と信じ込む症状の『コタール症候群』。その根底が認知症か、統合失調症かは定かでない。

「えっ？、やっぱり〇〇さん。あなたはドクターなんですか」

『さあ、生前のことで確かに覚えていることは何も無い。いろんな仕事をしてる映像が切れ切れに浮かんでくるだけで』

「例えば？」

『医師や役者。海賊だった気もするし、軍人だったようにも思う』

僧侶や英国紳士、虫やヌイグルミの話もした。

「すごいですね」

『どっかの国の大統領だったりもした』

医師が笑った。

およそどんな無神論者も死者を悼み、死者に語り掛け、それが何処かあいまいなまま、死後の幸福を祈る。おそらく太古の時代から繰り返されてきたこの素朴な思い。あらゆる宗教はこれを吸い上げ、体系化して、信徒を統治した。家族が集落へ、村へ、国へと組織化されていったように。どの宗教を信じようと信じまいと、人には必ず「死」があり、「死後」がある。死の瞬間が永遠の時空に開かれる刹那に、どんな世界が見えるか、は信じるもので違うだろう。その時、誰に会えるか、も。

女性医師は、何度も傍らに現れ、会話をした。

「〇〇さんは、亡くなった方たちと会えるんですか？」

『会いたい、と思っても自由には会えない。生前の世界と同じです』

ボクは『死んでから』会った人々の話をする。

「でも、もし死んだ人たちと会えるなら、そんな体験も悪くないな」

『先生は誰に会いたい？』

「たくさん居ますね。まずは父。わたしをこんなつらい道に誘い込んだ父」

彼女は笑った。

「それから、早く亡くなった中高時代の友人」

すこし声が低くなった。

「それと、オペで救えなかった人たち」

沈黙があった。

「とくに初めて死なせてしまった時の、中学生の女の子」

『会ってどうする？』

「わからない」

『まさか、元氣？って聞くとか？』

「それはないわね」彼女はかすかに笑った。「謝る・・・かな。わからない・・・あの時にできることはすべてやっ

た結果だったし。でも今の私なら救えたはず」

『先生の所に行くのが早すぎた』

「ふ・・・」力なく笑った「時間の入れ替えはできないわね・・・」

『この世ではね。でも今、眼を閉じたらきつと会える』

ドクターは目を閉じたが、すぐ目を開けた。

「会える気がしないし、やっぱりこわい気もする・・・」

時間がモザイク状に入れ替わっても、死後の世界に不思議はない。時間の前後が怪しくなる。時系列が分からない。これを認知症状の一つというなら、私には悪いことばかりでもない。楽しかった思い出が、つい先程の事のように活き活きとそこにあるのだから。

ナースの間でも話が伝わったのか、ボクの世界を聞き出そうとする者もいる。

「ご家族には会われましたか？」

面会がないのは、承知の上だ。

『しばらく会ってない気がする』

会ってない気がする？ もともといなかったのか。それもわからない。

「なかなかお時間が合わないんですね、きつと微妙な言い方をする。」

『波長が合わないのかもしれない』

「よく夢の中では、思われていないと会えない、つて言いますよね」

『そう、思われてないからチャンネルがつかないのかもしれない』

「あは、着拒を食らってたりして・・・」

「お父さんだけ、行けば良いんだよ」とTV画面を見ながら少年が言う。両手にはなんだろう？ カタカタ音をさせて操作するものを握っている。

「ようやく休みが取れたんだし。前も楽しかったろう？」

「あなたの趣味を押しつけないで」女性が言う。「・・・なら、バイオリンの発表会が近いから忙しいわ。わたしも山は苦手だし。一人で行ったら？」

虚空で足が空回りして進めない。この情景はなんだろう。

ある時の医師の声は、明らかに力がなかった。

「今日はお変わりありませんか」

『死人に変わりはありません。先生はお疲れですね』

「はい あ、いえ 大丈夫ですよ」

『大丈夫、それが怖いのです。何でも言ってください。こっちは死んでるんですから』

「ありがとうございます」

『ありがとうございます。こちらのセリフです。毎日、死体のケアをしてもらってる。ありがとうございます』

彼女の声は一瞬、湿った。

「ありがとうございます。医者への最高のご褒美ですよね」しばしの沈黙があつて

「でも一生懸命やったからって、いつももらえる言葉じゃない。一生懸命やるほど、誤解されることもあるし・・・」

『やっぱりなにか あつたんですね』

否定の言葉はなかった。

「睡眠時間を削って治療しても、気持ちが悪く伝わらないことがあるし、運が悪ければひとつの間違いですべてを失う。百人を救っても、一人が救えなければ非難される。医者は自分の安全も守らなきゃいけない時代です」

『一人に非難されても、百人が感謝していますよ』

「ありがたい。でも治してくれさえすれば気持なんかどうでもいい、つていう医療がはずれ主役になるんでしょうね。診断を下すのはAIの方が得意だし、手術もロボットのほうが正確にできる時代が来るでしょうから。新米だってベテランだって請求できる医療費は同じですから、効率のいい

病院だけが残る。医者のはほとんどは廃業。」

『そんな時代は来ませんよ。人間である患者が求めているのは、修理工場じゃありませんから。先生のように対人関係を大事にするドクターは永遠に求められますよ』

「・・・〇〇さんと話していると、なんだか癒やされる」

『ボクは死人です。医師ではありません』

「医師というより神に近い・・・」

『浄土真宗流なら、ボクはもう仏さまです』

医師は笑いながら去って行った。

かの文豪以外に、生まれた瞬間を覚えているという話は聞いたことがない。ボクの記憶にもない。そもそも人は生まれる前のことを恐怖に思ったりしない。前世が何だったか、は冗談の域にある。だがそこは死後の世界よりもずっと暗黒だ。人間でいえば、女性一生の排卵数百個のうちひとつに、なん億分の一かの精子が出会って、ヒトの生命がスタートする。裏側から見れば、何百億人かの中で、たった一人が助かったような、空恐ろしさにも似ている気がする。もしこの先、生まれ変わるのだとしたら、記憶はどうなるのだろうか。すべてリセットされるのだろうか。それとも何がしかの思いは持つてゆけるのだろうか。そしてひとつの願いが湧いた。あの女性医師なら。

『先生のお名前、なんとおっしゃいましたっけ？』

「△です」

『△先生に、お願いがあります』

「なんですか」

『ボクの霊気はすでに死んでいる。霊気を失った以上、肉体も遠からず医学的な死を迎え、葬儀社に引き渡される。その時、一瞬でいい。先生に手を添えてほしいのです。あのロンダニーニのピエタのように』

「ピエタ、つてあの聖体の十字架降架ですか」

『もちろんボクはキリストじゃないし、敬われたと思うているわけではありません。ただ、見舞いに来る家族もなく、病院の一室でひとり死んでいった者に、一片のいたわりと悔みを添えてほしいのです』

「ロンダ・・・なんとおっしゃった？」

『ロンダニーニです。"ロンダニーニのピエタ"は、ミケランジェロ晩年の未完成の彫像です』

それは長いことロンダニーニ邸に放置されていた。キリストもマリアも定かな顔がない。目鼻だちはあいまいで、未完のようでもあり、溶けかかっているようにも見える。「よく知ってらっしゃるんですね」

『だいぶ昔にTVでみた気がする。それだけです』

ボクにとって印象的だったのは腕だ。どこが気に入らなかったのかミケランジェロが途中でデザインを変更し、腕が体から切り離され、宙に浮いている。五体を失った今のボクにはその感覚が伝わって*。

すぐに返事はなかったが、何分か、何時間か、何日か、しばらくして、彼女は紙片を持って再来した。それはプリントされた写真だった。

「ありました。たしかに未完成ですね。でも・・・キリストが全裸の像はめずらしい」

ミケランジェロは裸体に深い思い入れがあった。邪念を持つ前のアダムとイブは、エデンの園では裸だったから。

『彼は常に、穢れなき人間そのままの姿として裸体を彫り、描きたかったのです』

「ただ、均整の取れた肉体への賛美だと思ってました」

『彼がステイーナ礼拝堂に描いた“最後の晚餐”のオリジナルでは、キリストを除くと、みな全裸だった、とか』

「人間だれしも生まれた時には邪念がなくて、裸ですものね」

『死ぬ時は、その肉体から霊気だけが抜けてゆく』

「〇〇さんの見たり感じたりしている世界ではどうです

か？」

『気がつけば自分が全裸の時もあります』

「周りの人もですか？」

『状況によります。社会的な場面ではみな着衣ですよ』

「安心した」少し笑った。

『でも全裸の時が一番、リラックスできるのは生前と同じ』

「お風呂の中のように？」

『たった一人、家やホテルに居る時、風呂上がりに全裸で動き回る開放感。経験は？』

「・・・正直、少しですけど経験あります・・・女性はいつも体を締め付けているから。でも、自分の体に自信がないから、なー」

『大丈夫。こちらの世界では皆、自分は理想の姿にもなれますから』

△医師は笑顔になって、ゆっくりぼやけていった。

「それで、痛いとか、苦しいところはありますか」

「気付くと野太い、男の声だ。」

『△先生は 何処に行かれたのですか』

口ごもる気配がした。

注意の焦点を絞り込んでベッドサイドを探ると 中年の

男性が《見えた》

「△先生は・・・」

ひとつゆっくり 深呼吸の気配がして

「昨夜亡くなりました」と、そう聞こえた。

『昨夜？ じゃあ、今までボクが《話して》いたのは・・・？』

なにか、が、忽然とベッドの隣に 現れた・・・煙のように 得体の知れないもの。

まるで 解けるアイスクリームの動画を 逆再生するように、それはゆっくり 人型を成していった。

『〇〇さん、私もこちらに來てしまいました』

白く綺麗な裸身だった。

『でも・・・これが私の理想の身体なのかしら・・・』
未完成だった顔は、端正な像に仕上がっていた。